

新歴史の見える風景

小舟渡遊園地

総合娯楽施設の先駆け

吉田郡永平寺町藤巻



▲対岸(九頭竜川右岸)から見た小舟渡遊園地跡



遊園地にはさまざまな施設が設置されていた。写真は入口付近の能楽堂と温浴場

京都電灯が福井の豊かな水資源に着目し、支店を設置して進出したのは明治31(1898)年のことである。翌年には酒生村(現福井市)の足羽川沿いに県内初の宿布発電所を完成させ、電力供給を開始した。その後も中尾発電所(勝山市)や小和清水発電所(福井市)を建設するなど事業を拡張する。当時、織物王国福井では電動織機への転換が急ピッチで進んでいたが、動力源が蒸気機関から電気へと移り変わる過渡期にあたり、当初は想定ほど需要が伸びず、余剰電力が生じていた。

一方、明治29(1896)年に北陸線の福井駅が開業すると、鉄道の有効性が広く認識され、大野・勝山地方では鉄道敷設への期待が高まった。京都電灯は、県当局の要請と補助金の交付を受け、余剰電力の活用策として電気鉄道の敷設を決定する。大正元(1912)年9月に着工し、大正3年には「越前電気鉄道」(新福



井く大野口間)が開通した。後の京福電気鉄道越前本線である。

工事は、発電所建設を通じて同社と縁の深かった飛嶋文吉(現飛鳥建設)が請け負い、大正3年2月11日に新福井く市荒川(現越前竹原)間が先行開業し、次いで3月11日に勝山まで、4月10日には大野口まで全通した(大野三番へは後に延伸)。

開業に伴い、主要な駅で祝賀会が催され、さらに5月15日・16日の両日には、約700名を招いた盛大な祝賀会が開催、その会場となったのが小舟渡遊園地であった。京都電灯は鉄道の敷設と併せ、小舟渡停車場の山麓に県内初の本格的遊園地を建設し、祝賀会はその披露も兼ねていたのである。

昭和初期に観光旅行やレジャーが大ブームを迎えるが、越前線の開通当時はまだその萌芽期にすぎなかった。

遊園地の建設は単なる乗客誘致にとどまらず、地域の発展を見据えた長期的視点に基づくものであったといえる。遊園地は、湧水豊かな山谷の地形を巧みに利用して整備され、園内には池や滝、観音寺などの社寺が配され、山を登る小径には地蔵が並んでいた。頂上からは九頭竜川や白山連峰を一望でき、「北陸随一」と称された夕景は人々の目を楽しませた。

その後、園内には飲食施設や電気浴場も整備され、活動写真(映画)の上映や、ラジオの公開受信も人気を博した。夏の夜、小舟渡橋に施されたイルミネーションの幻想的な風景は周辺の山々からも望め、冬には斜面を利用したスキーも楽しめた。九頭竜川河川敷は、福井中学校(現藤島高校)などの水泳場として利用されただけでなく、運動場や県内初の競馬場も設けられ、県民に「新しい行楽のスタイル」を定着させた総合娯楽施設の先駆けであった。(文:奥山秀範)



各種絵葉書が発行されたが、越前電鉄だけでなく、カラフルな鳥瞰図を刊行したことで知られる名古屋の澤田文精社製の絵葉書も残っている